# 佐々並公民館、令和六年度もお世話になります

令和六年四月を迎え、例年よりも少し遅い桜の開花と共に、佐々並にも新年度を感じさせる風景が見られるようになりました。これまでとは違った制服に身を包んだ児童や生徒たち、職場においても、見慣れない方がおられたりしています。

私たち佐々並公民館にも、このたび新しく吉崎和美（よしざき かずみ）さんを迎えての新年度が始まったところです。

昨年度の公民館活動は、昨年五月のコロナウイルス5類移行を受け、それまでのさまざまな制約の中での窮屈なものから、以前の制約のない形での実施が求に思います。しかし実際に私たちが実感させられたのは、コロナ禍真っただ中の数年間は、個人の活動だけでなく、公民館活動の原動力である地域の中のつながりも弱体化させていたという現実でした。「以前のような活動を」、と言ったとしても、数年間空白期間ができてしまった地域行事を「よし、やろう」という機運に持っていくのは、簡単なことではないことも実感しました。だからといって、活動を停滞させてしまうのは、公民館の本来の姿ではありません。まずそこで出た答えは、「関わってくださる人々としっかりお話をして、できることを

こう。」ということでした。その一つの例としては、体育行事の選手選考を、地区ごとから個人参加型へ切り替えたことなどがありました。本来ついても、これまでなかったウォーキング大会に取り組むなど、新しい参加者の発掘にもつながっているように思います。地域コミュニティを維持していくことは大切なことです。これまでの行政区ごとの単位から佐々並地区全体をひとつの単位として取り組もうと考えました。

そして令和六年度、まだまだ慣らし運転で手探り状態かもしれませんが、佐々並公民館としては、地域の皆さんからかわいがってもらえる存在になっていけるよう精進していきたいと思いますので、ご支援のほどよろしくお願いいたします。

追伸

本年四月の教職員人事異動で旭地域を離れられた先生方のメッセージを別紙で添えていますので、ご一読ください。

## 入ったよー

今月の新刊（佐々並図書室情報）

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

「MOST「ソ連」を伝えたモスクワ放送の日本人」　著：青島　顕

東西冷戦下、モスクワから発信される日本語放送。その現場では、少なくとも彼らはどんな人物だったのか。そして、志したのは報道だったのか、プロパガンダ（政治的宣伝）だったのか。それとも、両国に「MOCT（架け橋）」を築くことだったのか……。

【2023年 第21回開高健ノンフィクション賞受賞作】

「存在の全て」　著：塩田 武士

前代未聞「二児同時誘拐」の真相に至る虚実の名宮！
真実を追求する記者、現実を描写する画家。
質感なき時代に「実」を見つめる者たち――
著者渾身の到達点、圧巻の結末に心打たれる最新作。

【本屋大賞／ミネート作品】

★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★

今月のわくわく号
7日（火）・21日（火）
※ 活性化センター前 10：40～11：10

## 佐々並の今

（令和6年4月1日現在）

| | |
|---|---|
| 世帯数 | 263戸 |
| 男　性 | 256人 |
| 女　性 | 275人 |
| 合　計 | 531人 |
| （前月比 | ±0人） |
| 65歳以上割合 | 58.9% |

## ぎょうじよてい

5月8日（水）9時00分
佐々並小学校と寿クラブによる田植え作業
社会福祉協議会後方の圃場

5月11日（土）　9時00分～
旭ふれあいグラウンドゴルフ大会
イベント広場（明木）

5月18日（土）　8:00～
婦人会環境美化活動
国道262沿いの清掃活動

## ときわ会からのお知らせ

今年度も、5月・8月・12月の予定でアルミ缶の収集活動を行います

○第1回目収集日
5月24日（金）
午前9時～　商工会前倉庫

会員さんは、お声掛けをお願いします。
またアルミ缶のご提供がいただける方は公民館（56－0008）までご連絡願います。

## 総ぐるみ親睦球技大会

日　時：令和6年5月26日（日）
午前9時～　開会式
種　目：①グラウンドゴルフ
②ユニカール
③ファミリーの部として
新競技　パター・de・ビンゴ
会　場：①山村広場
②③活性化センター
詳しくは各戸配布します
チラシをご覧ください

## つぶやき

「シーズンイン・ザ・田」

今年度初トラクター乗りました。いよいよシーズンインです。表現が少し適当でないかもしれませんが、今年も「自然との闘い」が始まりました。本来なら、「自然との共存」とすべきなのでしょうが、一部の読者の方はよくご存じのとおり、秋の収穫をめでたく迎えることができるかどうか、私にとってはそれこそが【闘い】なのです。

先日、長時間トラクターに乗っていたため、作業はもちろんですが、いろいろ考えながら従事していました。今でこそトラクターに乗っていますが、昔は鍬（くわ）や鋤（すき）を使って手作業であったものが、馬や牛の力を借りてはじめの効率化が図られました。時代は流れ、エンジンを積んだ「耕運機」なるものが登場し、またまた大幅な転換期を迎えたのでした。（幼心に耕運機の上に乗っていた記憶は、ほのかに残っています）それが今やトラクターという座って操作することができる機械に移っていった訳で、操作が上手どうこうは置いといて、この時代でよかったなあと思う次第です。

もう一つの気付き。水があたった田の濁った水面から、つばめが巣作りのために空中での飛行体制から上手に口先で土をついばんで、一瞬できた波紋の光景を、何度も感心して見ていました。

いやはや、やはり生き物たちとは共存していかないといけませんね。